

〈書評〉

桒納タオ『夜明けの図書館 2』

(双葉社 (ジュールコミック), 2013年, 151頁)

山本 順一*

はじめに

コミックスは、低調な日本の産業活動において期待される‘クールジャパン’の代表的商品とされる。「環太平洋圏経営研究」にふさわしい素材のひとつと確信している。以前勤務していた大学において、マンガを学位論文の対象としようとした現職大学教員の社会人院生に対して、「マンガのような俗なものは(高尚な)学問研究に値しない」と切って捨てた同僚がいて、「なんとアホな寝言をいうか」と心中つぶやきながら、前任教授にタテを突かなかったことが悔やまれる。しかし、保守的な大学の世界において、そのように感じる輩は少なくないはずで、「研究紀要に掲載される書評にマンガをあげるとは何事か」とそしられそうな気はするが、臆面もなく、このマンガをとりあげることにしたい。

実は、このマンガ、双葉社JOUR(ジュール)¹⁾編集部の増尾徹さんから献本されたのである。献本には含まれていた案内に「本作品は、図書館利用者の調べ物をサポートする「レファレンス・サービス」をテーマに、新米司書がさまざまな難問に挑んでゆく、新感覚の図書館マンガの第2巻となっております。おかげ様で、1巻は重版を重ねスマッシュヒットとなりました」と記されている。

なぜこのコミックスが担当者の増尾さんからわたしに送られてきたかというところ、ちょっとした機縁があった。2012年2月23日、平成23年度兵庫県図書館協会第2回研究集会の講師に招か

* 本学経営学部教授

キーワード：マンガ，図書館，レファレンスサービス，調査質問，図書館情報学

1) ‘Jour’というのはコミックス雑誌で‘すてきな主婦たち’というサブタイトル誌名がつけられているところからも明らかなように、ヤング層に属する主婦を読者層にねらっている。毎月2日に刊行される月刊誌で「夜明けの図書館」はそこに連載されている。

れ、加古川市立中央図書館2F視聴覚室で、「図書館政策の動向と図書館経営」というタイトルで講演をしたことがある。そのときの会場の聴衆のひとりが、このマンガの著者の埜納タオさん²⁾だったのである。講演のあと、主催者側の兵庫県立図書館の方から埜納さんを紹介された。彼女自身も‘すてきな主婦たち’に属する。

この講演のあと、当時は図書館（情報）学教育部会のメンバーのひとりであったので、同部会の会報に埜納さんに同部会の会報に原稿を書いてもらえばどうかと幹事の人たちにメーリングリストで諮ったところ、異論はなく、交換させていただいた名刺を頼りに、一見さんのわたしが図々しく埜納さんをお願いメールをしたのである。その返信はご本人からではなく、担当の増尾さんから電話でいただいた。講演のあとのやりとりから、‘レファレンスマンガ’のアイデアは増尾さんの前任者の担当の方から提供されたものと聞かされていたし、経緯からマンガ家との交渉は編集担当と行うものだということが理解できた。増尾さんの同意も得られ、埜納さんの原稿はほどなく、2012年9月3日発行の記念すべき「会報 100号」の冒頭を飾ることになった³⁾。

内容紹介

同じ著者の『夜明けの図書館』の第1巻は兵庫県立図書館の方に教えていただいたそのほかの図書館マンガとともに研究費で購入し、目を通したが、ここでは触れることはしない⁴⁾。ここでは、標記の『夜明けの図書館 2』に限定して論じることにした。

このマンガの主人公、葵ひなこは第1巻のときからひとつ年齢を加え、26歳になった暁月市立図書館の司書である。3年の就職浪人の末、めでたく採用されて2年とある。ということは、短期大学の司書課程もしくは司書講習で資格を得て、入職したことが分かる。少なくない公立

2) 彼女の公式ウェブサイトをご覧いただければ、なぜ私がこの書評を書く気になったかがお分かりになるろう。

http://www16.ocn.ne.jp/~tao/Tao_Site/ye_natao_Official_Web_Site.html

3) 埜納さんのホームページからも図書館（情報）学教育部会のウェブページにリンクが張られている (http://www.jla.or.jp/Portals/0/data/bukai/kyouiku/bukaiho_100.pdf)。

4) 図書館現場や図書館情報学の研究者たちの間では大いに話題となった。たとえば、佐藤毅彦「2011年、東日本大震災の年に、図書館はどのように描かれたか:映像メディアとコミック・文芸作品に登場した図書館・図書館員に関する事例研究」甲南国文59, 200-180 (2012.3) を参照。 (<http://www.konan-wu.ac.jp/~nichibun/kokubun/data/59sato.pdf>)

この佐藤論文には、2011年10月の「夜明けの図書館」第1巻刊行直後の反響にふれ、その内容についても詳しく解説されている。また、山口真也「夜明けの図書館：レファレンスサービスは夜明け前？」みんなの図書館 (419), 53-57 (2012.3), 同「夜明けの図書館 (2) レファレンスサービスはオーバースペック？」みんなの図書館 (420), 63-67 (2012.4) などのほか、少なくないブログでも取り上げられている。

図書館への採用試験の基礎的学歴が短大卒程度とされていることに照応する。

第2巻冒頭の第5話は、「ありがとうの音」という題がつけられている。最初のページに、話の流れには直接関係しないのであるが、おばあさんが「紅茶の種類について知りたいんだけど」とフロアワークでシェルフリーディング（shelf reading：書架整理）をしているひなこに参考質問を投げかけている。そして、カウンターにおばあさんをいざない、関係する資料を提供し、貸出サービスにつないでいる。実は、この‘紅茶’、そして‘犬’や‘猫’など、身近なことがらについての利用者の質問が多いと図書館現場の人に聞かされたことがある。この第2巻のなにげない冒頭のページにも、しろうとのハズの著者の調べの深さがうかがえる。そして、ヘビーユーザ（常連客）の丸山綾（28歳）が娘のユカ（4歳程度？）を連れてカウンターのひなこのところにやってきて、「ぞうりむしのランラン」（絵本にはとんと弱いわたしは気になって検索したが、このような絵本はヒットしなかった）の貸出手続きをする。そこで（ひなこ）「ユカちゃん、その絵本お気に入りなんだね」（丸山綾）「同じのぼっか読みたがって」とのやりとり。これは子どもたちの普通の反応であるだけでなく、最近ゼミ生とたわいない話をしていて気が付いたのであるが、学生たち（♂）がツタヤで借りるアダルトビデオにも共通する傾向らしい。

そして、（丸山綾）「絵本選びのコツってあります」に対して、ひなこが「（丸山綾が）子供の頃に大好きだった絵本を読んであげたらどうですか？」と答える。ここからこの話の本筋がはじまる。右足の骨折で入院している、綾の姉で一見性格が悪そうなバツ2のホステス美咲（33歳）に頼まれた、これはもじりの‘ハーレキングロマンス’シリーズの1冊、「麗しの伯爵」をひなこに探してもらい、これも借りてゆく。が、（美咲）「わたしの読みたいのはテキサス編」といって、綾の好意を台無しに。病院のベッドの美咲とユカとのやりとりから、綾が「お姉ちゃん（=美咲）、私が好きだった絵本、覚えてない?」、「動物が旅する話」、「タイトルはでてこないけど…」と美咲に尋ねる。そして、綾が「‘ありがとうの音’、そんな言葉で終わったような気がする」と述べる。

あらためて図書館にでかけた綾はひなこに「好きだった絵本のこと、思い出したんです」、「2匹の（なにか動物の）兄弟が街へ出て、おいしいものを食べて…パーティに潜り込んでワインをのんだり、ケーキにとびこんだり…」と語る。（その絵本の）「さいごに‘ありがとうの音’って言葉がでてくるんです」との言葉がレファレンス・インタビューのくりである。これで特定の本物に関するレファレンスサービスの過程がスタートするわけである。

高度な調べを必要とするこの調査質問は、ひなこの努力の甲斐あって、「ごちそうは森のなか：りすきょうだいのぼうけん」（この本もNDLサーチでは実在しない）という絵本にゆきあたる。20年以上前、母子家庭で淋しく育つ幼児の綾に（ふつう悪女にもひとかけらのすばらしい思いやりがあるもので）姉の小学生の美咲が「ごちそうは森のなか」をやさしく読んでやるが、妹

綾には「とうさんりすがかたぐるま」と出てくる最後のページが酷なように思え、隠そうとした（現在の綾は娘ユカ「ワハハのおとうさん」という絵本を図書館から借りようとしたとき、彼女にはいなかった父親が出てくる絵本をみてよく泣いた幼年時代を思い出している）。その横書きのページの端にはみだした縦1文字の列が「ありがとうのおと」と読めた。性悪の美咲もその絵本にまつわるエピソードを思い出し、前向きに生きようとするようになるという心温まるストーリーである。

「男子の自立」というのが第6話。こんどはヤングアダルトである。ひなこは、地元の中高一貫の男子進学校、暁月北中の部員不足で廃部寸前の‘料理部’（？）に属し、2週間後の文化祭に備える生徒3人に館内で「僕たち‘飾り切り’（＝野菜を花の形に切ること）の本を探しているんです」といわれる。‘飾り切り’を知らないひなこは図書館の料理の棚に案内するが、生徒たちはティーンズコーナーの売り込みを図ろうとするひなこを相手にせず、学校に戻る。部長の千葉亮輔（15歳）（チバちゃん）の「ムダ足だったか、1日2回も図書館来るなんて…帰ってググろ」という言葉によくデジタルネイティブの顔がのぞく。

料理部再建にひとり燃える、ニッチもサッチもいなくなった、オカケンとガッキーのたった二人のヒラ部員に見放されたチバちゃんは、落ち込んで‘ティーンズコーナー’の張り紙‘元気をチャージ’の下に展示された「15歳から始めるモテる習慣」と‘心に効く本’の下の「自立宣言」を借り出す。恥ずかしい思いで借りた「15歳から始めるモテる習慣」に「君は男友達を大切にしているかい？ 同性から信頼が厚いヤツは女子ウケもよい」とのくだりがあり、仲間の料理部員2名のことを思い出し、開いた「自立宣言」の序文に「思いやりの心あってこそ真の自立になり得ると」とあるのを見て反省するに至る。

翌日、調理室にきたガッキーから暁月北中の校章がじゃがいもの花だと聞かされ、3人の生徒は暁月市立図書館に飛んでゆく。そこでレファレンスを受けたひなこは「県立暁月北中・高等学校百年誌」に書かれた初代校長の発案でじゃがいもの花を校章に定めた由来を提供する。生徒たちは、その百年誌のなかに明治44（1911）年創立記念行事に入学者に対して軍隊料理をもとにし、校内で収穫されたじゃがいもを使った‘今も伝えられる’（軍隊式）ライスカレーをふるまったとの記事を見つける。料理の棚に見つけた「明治期の西洋料理」に書かれた‘軍隊料理法 ライスカレー’に到達する。料理部は文化祭でこの軍隊式ライスカレーをふるまい、非婚時代の‘男子の自立 厨房にあり’を訴える。ふっきれたチバちゃんが図書館のひなこになかば誘導されるかたちで借りた「自立宣言」等を返却しながら、カウンターで「ありがとっ」という言葉を口にする。そこにガッキーが飛び込んできて（料理部）入部の申込み殺到とのメッセージを述べる。ティーンズコーナーの交換ノートの書込みもあり、ハッピーエンディング。

第7話は「へこおろぎや」である。今度は、江戸時代創業の市内でも伝統ある老舗旅館で働いた芸妓たちを対象とする高齢者サービスである。ボケて余命幾許のかつての芸妓、おフミさん（79歳）が高乃屋の吾郎さんというイケメンの恋人をとりあったときに耳にした（と思われる）‘こおっろぎい〜…やあ〜’という唄いだしの小唄のことが忘れられず、まだしっかりしている、かつての宿敵あいかたのおスッキリ小股の切れ上がった小松妙子（77歳）に調べを依頼する。それを唱歌についての電話でレファレンスの回答をしている横のカウンターで、参考質問（reference question）としてひなこが引き受けるという筋書きである。

ひなこが調べまくった結果、唄いだしの異なる「鈴虫や」という小唄が見つかる。秋の夜半、悲恋の現場にコオロギが鳴いていたので、鈴虫と記憶が入れ替わったものと判明する。そして、国立国会図書館がデジタル化し、国立国会図書館の館内限定もしくはインターネット上で配信提供参加館である公立図書館等に対して公開されている音源資料データベースのなかに、この曲があることがわかる⁵⁾。妙子は寝たきりで施設収容がまもなくのおフミさんをタクシーに乗せ、おぶって図書館にともない、「鈴虫や」を聞かせる。この曲を聞かされたおフミさんがしばし正気に戻ったかのようなマンガ表現も、おふくろを定期的に見舞っている個人的経験に照らしても、ボケた高齢者がマダラボケであることはよく理解できる。

最後の第8話は、父親の仕事の関係で転校の多かったひなこが小学校の頃に大いにお世話になった、退職を迎えた学校司書の山下透子との交情を描いた「笑顔のバトン」である。この話は、四葉のクローバの押し花の葉が封入された、山下先生のひなこ宛の手紙からはじまる。業務のやり方によっては、人を不幸にする蓋然性がきわめて高い、必要悪の警察官や新聞記者と異なり、図書館員が「人を笑顔にできるやり甲斐のある仕事」で、かつての教え子に「応援していますよ」と書かれていた。

そのとき、2週間前に東京からひなびた地元の小学校に転校してきた5年生の倉橋奈々（11歳）が図書館に出入りするようになり、ひなこは、かつての自分と奈々を二重写しにするようになる。子供向けのファッション誌「プチ・ガール」愛読の、中途半端にこましゃくれた奈々には同級生の年齢相応の子供らしさと自然らしさのいくらか残った地方の良さが理解できなく、浮き上がる。

同級生のこしらえた土手で拾った綺麗な羽根飾りを汚いとけなし、クラスになじめぬ奈々は身近な環境に眼がいくようになり、通学路の木の下できれいな鉛色の中に黒い玉が入っている

5) 国立国会図書館デジタル化資料の歴史的音源・邦楽のなかに宮城道雄作曲の「鈴虫」が2つ入っており、現在ではインターネット上で公開されており、1929年6月にビクターから発売されたものを聞くことができる。

植物の実を拾う。奈々はこの植物の実が何か知りたくて図書館に立ち寄る。ひなこはかつての山下先生にかまってもらい、さまざまな身の回りに繁茂する野草を対象として調べる面白さを教えてもらったことを思い出しながら、奈々と一緒に図書館の関係文献を調べてゆく。林業の棚にあった本から、それがムクロジ（無患子）の実であることが判明する。ムクロジの実の果皮にはサポニンという成分が含まれ、その皮を用いてシャボン玉遊びができることから、ムクロジが‘石鹸の木’と呼ばれることも分かる。

むかし、午後3時頃ににわかに花を開き、まもなくしおれるサンジカ（三時花）を見つけてそのことを文献で確認し、その感動をクラスメートに伝えようとしたことから孤独から抜け出した経験を持つひなこは、ムクロジをすごいと思った独り閉じこもる奈々から積極性を引き出すことに成功する。ひなこは、市民に開かれた公共図書館に必要とされる‘郷土関係情報のパスファインダー’の作成にも眼が開かれる。

巻末の楽屋ネタの‘あとがきマンガ’には、このマンガ執筆に相当の時間とエネルギーを使ったことが明らかにされている。和装本が新鮮に感じられたことも正直に書かれている。また、業界で教わったのであろう‘**ト**’と書いて‘図書館’と読ませる国字ならぬ業界字も出てくる。「**ト**」のレファレンス・サービス。人に尋ねるのはちょっと…という方も、一度利用されてみてはいかがでしょう？ きっとあなたの町のリアル葵ひなこが親切に対応してくれるはず」とも書かれ、‘リアル葵ひなこ’をひとりでも多く育てるのがわたしたち図書館情報学を守備範囲とする大学教員の役割だと思う。最後のページの片隅に「1か所は必ずほめてくださる、頼りになる新担当のMさん」とあるのは増尾さんのことである。

論点の整理と検討

第5話から第8話までの4つのストーリーはよく仕込まれていて、テレビの中村吉右衛門が演ずる鬼平犯科帳のように日本的な人情話で、それぞれホロッとさせられる。私自身はそのようなウェットな議論が得意ではないので、もっぱら図書館情報学とのかかわりでいくつかの論点を取りあげ、論じることにしたい。

第5話の「ありがとうの音」は特定の絵本の探索で、デジタル時代が深まる今後も幼児教育の教具・おもちゃとしての（厚）紙の‘絵本’はある程度生きながらえるものと思われるが、第6話の暁月北中料理部のOPAC検索、第7話に出てくる‘鈴虫や’の音源提供をのぞき、第6話の‘軍隊式ライスカレー’、第8話の‘ムクロジ’の調べなどにおいて、もっぱら紙媒体資料のフル活用が描かれているように思われる（第5話の「ごちそうは森のなか」ではデータベース検索も併せて行われたように見える）。第6話の‘飾り切り’の生徒たちの館内設置端

末でのOPAC検索がレファレンスプロセスから切断されて取扱われていることにはいささか問題を感じる（‘飾り切り’という検索語でGoogle検索をすれば、野菜・果物・玉子・ハムなどの‘飾り切り’を内容とする約73万件がヒットする）。また、第6話においては、ひなこはチバちゃんに対して、図書館の書架を眺め回して、気になる図書等があれば目次やまえがきなどを拾い読みし、期待する情報を探す行為である‘ブラウジング’の大切さを説いている。そして、チバちゃんは「モテる習慣」「自立宣言」に接することができた。しかし、これは一般に関係書に書かれていることではないが、検索語をいろいろ変えて行うネットワークサーフィンでも同様なことができることは触れられていない。これらの事実から、このマンガには、日本の公共図書館実務のデジタル対応への遅れが反映されているように感じられた。

見方を替えれば、第5話の「ごちそうは森のなか」と第6話の‘軍隊式ライスカレー’の探索は、ひとつの気づきを契機として、関連する事柄を次々と明らかにする、いわゆる‘イモヅル式探索法’（berry-picking method）の利用を描いている。このやり方は、ピンポイントの情報獲得を目指すデータベース検索と併用されるべきものであるが、データベース検索については十分には描かれてはいない。

第5話の「ごちそうは森のなか」、第7話の「鈴虫や」は、レファレンスサービスのなかでも粘りが求められる‘調査質問’である。あらゆる分野にレファレンスツールがあり、すべての方面にその道の専門家・専門機関が存在し、レフェラル・サービスに展開できるものであり、がんばればほとんどのことが分かるということをもっとしっかり描いてほしかった。どちらかといえば、この国のレファレンスサービス観はいまだにかなりの程度紙媒体に異常なまでに依存し、外部情報源に乗り出すという動態的なところに乏しく、静態的サービスにとどまっているように思われる。ときに言われることであるが、重厚な‘ネットワーク’より軽やかな‘フットワーク’が望まれるとの指摘があってもよいように思う。

第5話では横書きの絵本の最終ページを縦書きに読み、結果的にはその絵本にはない文言があったとの‘ゆれ’が話のポイントとなり、第7話の「へこおろぎや」では現実に鳴いてそこにいた‘コオロギ’が歌詞の‘鈴虫’と入れ替わり、利用者の‘ゆれ’を生み出したことが話を面白くしている。ウソをつくという本質とは別に、悲しい性もあって多くの記憶があいまいな人間から発せられる現実のレファレンスでは、百パーセント利用者のいうことを信じてはいけなく、レファレンスライブラリアン自身の記憶も信じられず、レファレンスプロセスで生じたレファレンスライブラリアンの思い込みも避けがたい。

第6話は中学校の生徒、第8話は小学校の児童が公立図書館の利用者になっており、文化祭のライスカレー模擬店、通学路に落ちたムクロジの実がテーマとなっている。子どもたちに体感なく一定の体制的イデオロギーを混入させた刷り込み型教科書学習とは異なり、身近なところから考えさせようとする設定は貴重だと思われる。しかし、第8話に山下透子先生がいる学

校図書館は思い出として語られるが、中学料理部と倉橋奈々には学校図書館の場面は出てこない。学習指導にも取り上げられ、建前としては重視されるようになった学校図書館ではあるが、表層的な評判は別として、中途半端な学力競争が展開されるこの国の学校教育において、形だけの司書教諭しか置かれない多くの公立学校図書館の問題には眼をそらす結果となっている。図書館側がそれなりにがんばっている、日本の公共図書館のティーンズコーナー（ヤングアダルトコーナー）がほとんど使われないのは、第6話にも「部活や塾で忙しい」とあるが、ほんとうはそうではなく、学校と塾のダブルで上級校の入試問題を解く受験テクニックの習得に明け暮れ、図書館で主体的に調べものをせざるを得ない学校教育が行われていないからにほかならない。

よくできたストーリーのこのマンガが情報探索に関わる知識とスキルを伝えることを目的とする学習漫画とはなり得ないのは、日本の主として公共図書館界の現状とそこで働く著者の埜納タオさんをサポートした親切な人たちの限界を示しているようにも思われる。

* 本稿でとりあげURLを示したウェブページについては、2013年8月30日にアクセスしたものである。

(2013年9月4日受理)